



代表 岩井忠熊

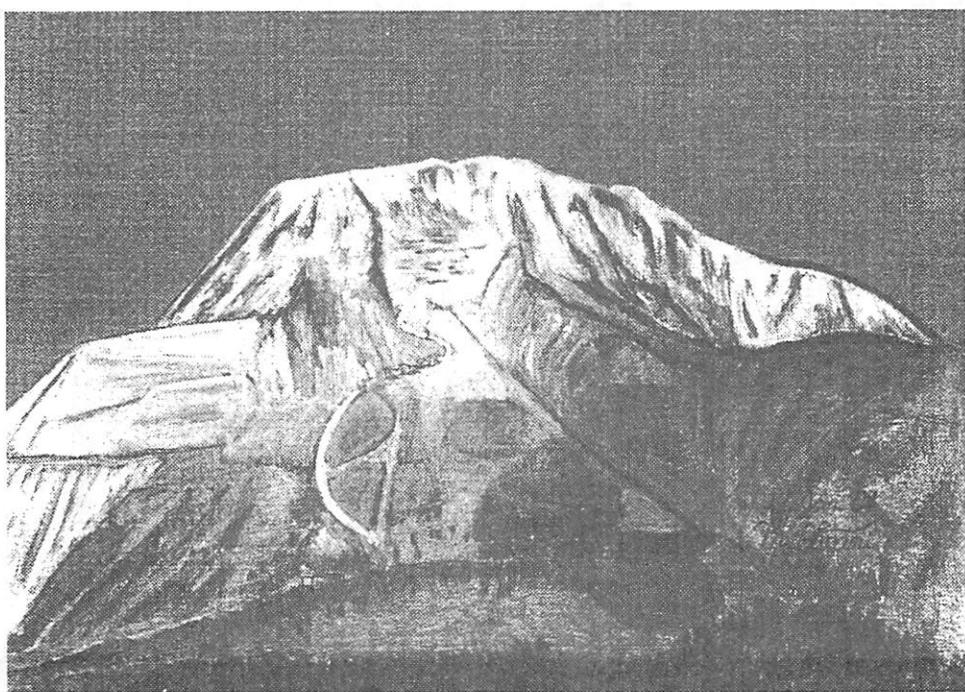
会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込口座番号〕

01060-7-15762

加入者名 燎原社

スケッチ『伊吹蒼穹』—青空のなか冠雪の伊吹を描く—



大南正瑛画

執筆者紹介

ひとすじの道
—高田三良の生涯—

内海
繁

平盛美佐緒の思い出
—岡山労働運動の
草分けの一人—

水野
秋

編集後記

平盛美佐緒の思い出

—岡山労働運動の草分けの一人—

水野 秋

一九四六年五月一日——岡山市の復活メーデーは雨中の行進となつた。雨に打たれながらの行進の過程で二つの感動的な出会いがあつた。一つは華北から引揚げて来たばかりの江田三郎の姿を目撃した農民組合のデモ隊から歓声が上がつての出会いであつた。東京高商を中退して故岡山の農民運動に参加し全農岡山県連の屋台骨を背負い若くして社会大衆党の県会議員に当選、戦前革新運動のホープと目されていた江田は一九三二年の人民戦線事件で検挙され出獄後、日中戦争下の大陸に渡り華北の農村で宣撫工作に従事し敗戦で引揚げてきたのだ。新聞で復活メーデーの開催を知った江田は福渡町の実家から岡山市へ出てきて街角に立ちデモ行進が来るのを待つていた。

「あつ！江田だ」、「江田！お前よく生きていたなあ」——口々に叫んで駆け寄つた往年の仲間達に囲まれての感動の対面こそ戦後

の江田の再出発へのスタートだった。そして、もう一つの感動的な出会いは大正末期から昭和へかけての岡山県労働運動の黎明期に献身的な活躍をした平盛美佐緒と往年の仲間達との感動的な出会いである。その頃、既に京都で暮らしていた平盛は復活メーデーに矢も楯もたまらずわざわざ古戦場の岡山へやつて来ただ。共産党的デモ隊の中から駆け寄つた数人に取囲まれてお互に感涙にむせびながらの対面であった。

しかし、ただ昔の仲間に逢いたくて岡山へやつて來た平盛はメーデーが終わると京都へ帰り戦後の岡山の運動に参加することはなかつた。平盛と京都との縁は弾圧ですべての社会運動が消滅した後、指物師だったかつての仲間の紹介で立命館大学理工学部の用務員に就職したからであつた。そして戦後、立命館大学職員組合の委員長に選ばれた平盛は日教組への加盟

を実現し近畿地区の私大職組協議会でも活躍した。

私が京都に平盛を訪ねたのは確か七〇年代の末頃で岡山県総評から、「岡山県社会運動史」の編纂・執筆の委嘱を受けての取材の過程で、「これはどうしても平盛に逢わねばならない」と痛感し八方手

を尽くして消息を訪ねた末にようやく京都の住所を探し当て手紙を出した。あの復活メーデーにおける感動的な雨中の再会を直ぐそばで目撃したというおぼろげな記憶はあつた。あれから一〇余年、「果たして健在だろうか」という不安があった。そして、「用件了承、お待ちする」という返書を受け取つた時の飛び立つような感動は未だに忘れる事はできない。

約二時間ばかりの思い出話を取材出来たことによって執筆の内容は一段と充実したが、取材を通じて明らかになつた貴重な史的事実をあらためて機会を得て書き残しておかねばと思いつながら今日まで果たせなかつた。七〇代も半ばを過ぎてこのままでは時間切れになつてしまいかねないので、「燎原」に寄稿させていただくことにした。

平盛美佐緒は一八九一年一月、広島県深安郡神辺町に生まれた。家は先祖代々の五反百姓（自作農）で六人兄妹の次男だつたが兄が早く死したので妹が四人という兄妹で

時代は正に大正デモクラシーの時代はまさに大正デモクラシーの上昇期で鈴木文治が創設した友愛会が激しいアナ・ボル論争の過程で協調主義を克服し戦闘的な総同盟に発展しつつあつた頃で岡山の街を歩いていて、「労働組合の集会を医師会館で開く」というビルを見た。「それまで労働組合とかかわりを持つことはなかつたが、いくらか関心はあつたのだろう」と、平盛は語つてゐる。会合へ出てみたら近所で顔見知りの藤田俊徳（時計商）がいた。かねてから社会運動に関心を抱いていた藤田は社会科学の研究会などに参加していたことはがいた。かねてから社会運動に関心を抱いていた藤田は社会科学の研究会などに参加していたことは後になつて判つたことだが、藤田とここで出会つたことが仲間に入る契機となつた。

偶然は重なるもので、その後に小林一夫という渡り職人が東京からやつてきて、しばらくの間、平盛の町工場を手伝つていた。そこで一人が相談して創つたのがマ

ルクス万年筆」であった。小麦粉をまぶしてこすると毎もじやでおなじみのマルクスの顔が浮き出てくる万年筆は別にこれという宣伝もしないのに医大や六高の学生達の間で評判になつて飛ぶように売れた。本気で売るつもりはなかつたので量産はしなかつたのだが、それでも多忙に追われ、「くたびれただけであまりもうからなかつた」そうだ。

当時、岡山の労働組合は最大の宇野の造船所（現在の三井玉造船）をはじめとしてすべて総同盟に属しておらず、指導者の板野勝次が山川均の弟子であったことから左派補し共産党唯一の地方区当選者と一緒に占められていた。戦後、一九四七年四月の第一回参議院選で岡山地方区から共産党公認で立候補し、共産党唯一の地方区当選者となつた板野は晩年に自らの闘いの星霜を振り返りながら次のように述懐している。

「私は決して特定の個人を崇拜しない。かつて個人を崇拜し

て二度も裏切られた。一人は山川均でありもう一人は毛沢東だ」

（『嵐に耐えた歳月』一九七七年七月、新日本出版社）

平盛の本格的な活動は一九二五年に神戸で開かれた総同盟の分裂大会に出席してからだった。それまで年を追うごとに激しさを増し

ていた組織の主流派（社民系）と反主流派（共産派）の対立はこの大会でクライマックスに達し遂に分裂、右派と決別した左派は日本労働組合評議会を創立した。その委員長に選出されたのは岡山県出身の野田律太であった。

さて、それからは左右両派の組織争奪戦が全国にわたつて展開さ

れるのだが岡山でも板野を先頭に精力的なオルグ活動を展開した。

板野は県下最大組織の玉船労組へ

の工作を平盛らにまかせて広島の因島造船労組へ飛んだ。如何に玉

船労組を確保しても因島労組を総

同盟に獲られたら今後の運営に重

大な支障を来たすという判断によ

るものだったが、この判断は的を射ていた。一方、玉船労組への働きかけを任せられた平盛は日夜、足

を棒にして岡山から宇野へ通いつめた。玉船労組の組合長だった近藤勝は平盛より年輩で実直な男だつたが後には平盛の住居に居候するほど親しくなつた。

板野の組織作戦は奏功し因島、

玉船両組合とも「評議会加盟」を表明し松永の木履関係や福山の紡績も押さえ込んだ。しかし、ほどなく金正米吉が因島へ乗り込んで

きて、「昨日や今日の板野の若僧

とのわしのどつちを信用するん

や」と恫喝し労組幹部の金光平を

相手に激しい論戦を開いた。論

戦では鍋山がリードしたが、なん

といつても因島を奪われたことは

致命的で最終的には業種別の関係

上、総同盟に属し地域的には岡山

労組との友好関係を維持するとい

う妥協案で決着し、しばらくは岡

山のメーデーにも参加していた。

しかし、こうした不自然な妥協案

は続かずやがて岡山労組との友好

関係は近藤組合長の個人的な行動

と化し、その近藤が不信任で退任

するとほぼ総同盟に取りこまれ焦

った左派が乾坤一擲の勝負に出た

大争議に惨敗すると西尾末広がや

ってきて総仕上げをした。

組織争奪戦に敗れた中国地方評

議会は本部を岡山へ置き委員長に

橋本朝一郎（歯科技工士）、中央

委員・常任書記に平盛を選んで旗

を上げた。組合員は僅か一〇〇名

足らずで組合費はほとんど集まら

ず日常の活動も出張費もほとんど

自弁という困難な出発だった。そ

れからほどなく板野の評議会本部

入りが決まった。これには周辺の

誰もが驚き引き留めにかかったが

農民組合を中心とする岡山では左

派の労働農民党一色で右派の社会

民衆党も中間派の日本労農党も一

口説き落としてひっくり返した。

なかつた。

あの時の板野の神戸行きに平盛の余勢を駆つて玉船へ乗り込んだ。大会でクライマックスに達し遂に分裂、右派と決別した左派は日本労働組合評議会を創立した。その委員長に選出されたのは岡山県出身の野田律太であった。

さて、それからは左右両派の組

戦では鍋山がリードしたが、なんといつても因島を奪われたことは致命的で最終的には業種別の関係

上、総同盟に属し地域的には岡山労組との友好関係を維持するという妥協案で決着し、しばらくは岡山のメーデーにも参加していた。しかし、こうした不自然な妥協案は続かずやがて岡山労組との友好関係は近藤組合長の個人的な行動と化し、その近藤が不信任で退任するとほぼ総同盟に取りこまれ焦った左派が乾坤一擲の勝負に出た大争議に惨敗すると西尾末広がやってきて総仕上げをした。

組織争奪戦に敗れた中国地方評議会は本部を岡山へ置き委員長に

橋本朝一郎（歯科技工士）、中央委員・常任書記に平盛を選んで旗を上げた。組合員は僅か一〇〇名足らずで組合費はほとんど集まらず日常の活動も出張費もほとんど自弁という困難な出発だった。それからほどなく板野の評議会本部入りが決まった。これには周辺の誰もが驚き引き留めにかかったが農民組合を中心とする岡山では左派の労働農民党一色で右派の社会民衆党も中間派の日本労農党も一

歩たりとも入りこむことはできなかつた。当時、非合法下の共産党の主張に最も親近感を抱いていた平盛は、「政治には不向き」であるという自覚から入党はしなかつた。入党はしなかつたが、「われ何を為すべきか」と悩みを抱いて平盛を訪ねてくる六高中生と、第一回普選準備のオルグとして来岡した金子健太と六高生達を引き合わせたことによってほどなく六高中生を中心とした共産党岡山地方委員会が発足した。

一九二六年一一月六日、岡山師会館で鉄工組合と岡山合同労組の合同大会が開催され評議会本部から河田賢治が参加した。この大会で橋本、平盛を中心とする指導部に中島勇といふ元気のいい若者や勉強家の八田茂、平盛の義兄山下多三郎など新しいメンバーが加わった。当時の最大の課題は鐘紡西大寺工場など紡績関係の組織を擁して評議会系よりも数倍の規模を保持しているアナキスト系労組との競合で少なくとも肩を並べられる程度の組織にするため倉敷の活動家石井芳太郎を中心活動家が次々と輩出するような状況になつて来たがほとんどは組織

の実態がないために遠去かつていった。
第一回普選の直前に労働農民党へ入党した平盛は第一区から立候補した水平社出身の三木静次郎の応援に張り付き岡山を中心とする備前から鳥取県との境に近い美作一帯にわたる選挙区の隅々まで走り回つた。温厚な紳士で階級意識もしつかりしていた三木の人柄を好感しての活動は平盛にとって後々までも忘れられないものになつた。選挙戦の直後に三・一五の弾圧が来た。岡山では六高を中心とする共産党组织や農民組合の活動家など少なからず検挙されたが労組関係はほとんど被害はなかつた。事件が一段落してから新たな困難が生じた。それは労働農民党県連の書記長として県下無産運動の要の位置にあつた佐々木銀一の社民への転向であつた。

県西部の広島県との県境に近い笠岡の飲食店の家に生まれた佐々木は幼くして京都の紋描き屋へ奉公に出で紋描きの技術を修得して帰郷し岡山市の目抜き通りで開業して大いに繁昌した。しかし、佐々木が京都で学んだのは紋描きの技術だけでなく、それ以上に社会の矛盾と闘うべき階級意識であつた。だから佐々木は商売が軌道に乗るに上京して社会民衆党本部を訪ね、岡山へ帰ると記者会見して、「岡山に社民党的旗を揚げる」と宣言した。おりから三・一五事件で解散せられた労働農民党内は新党結成の是非をめぐつて騒然としていた時だけに佐々木の社民党への

労働農民党県支部連合会の結成で三木静次郎委員長の下で書記長に選ばれた。もうその頃は商売の方は弟子達にまかせ運動のために日夜、県下を飛び回るようになり商売の儲けのほとんどを運動につぎ込み、五人、一〇人と若い活動家が日夜、佐々木の家で飯を喰べて西へ東へと出て行くようになつた。それほど献身的だった佐々木が三・一五事件で検挙され数カ月後に釈放されて帰つてみると、突然、「運動から身を引く」と言い出した。

驚いた平盛らは、「一体何があつたのか」と、佐々木に訊ねたが佐々木は何も語ろうとはしなかつた。その後うち佐々木の変身に激怒した若い活動家達が佐々木の家に怒鳴り込んだり石を投げたりするようになつた。それはいずれも佐々木の家で飯を喰べていた活動家達だったから佐々木が受けた打撃も少なくなかつた。佐々木としては運動から身を引いて家業に専念するつもりだつたが、こうも激しく責め立てられると反発心も湧き不意に上京して社会民衆党本部を訪ね、岡山へ帰ると記者会見して、「岡山に社民党的旗を揚げる」と宣言した。おりから三・一五事件で解

転向表明の波紋は県下無産戦線を騒然とさせた。だが、こうした意地ずくの対抗意識だけで始まつた活動が実を結ぶ筈がなく、やがてすべてを失つた佐々木は失意の余り広島県の呉でカフェーの女給をボートに乗せて夜の海へ漕ぎ出し心中して果てた。この出来事から夜、県下を飛び回るようになり商売の儲けのほとんどを運動につぎ込み、五人、一〇人と若い活動家が日夜、佐々木の家で飯を喰べて西へ東へと出て行くようになつた。それほど献身的だった佐々木が三・一五事件で検挙され数カ月後に釈放されて帰つてみると、突然、「運動から身を引く」と言い出した。

三・一五、四・一六事件が一段落した頃から岡山の無産戦線の中心的存在として抬頭して来たのが中原健次であった。若くして上京し警視庁の巡査になり神楽坂の交番に勤務した中原は近くに住居の在つたアナキスト大杉栄の監視や活動の報告を命ぜられ任務に従つてゐるうちに疑問を持つようになり岡山へ帰つて魚市場で働きながら政治研究会に参加して徐々に仲間の信頼を集めようになつた。

平盛は自分より一歳年上の中原と最初は意氣投合したが、中原が岡山市議に当選してからだんだん疎遠になつていった。労働運動がすべてだつた平盛に対し市議になつた中原は自らの活動基盤を強化するため市政刷新同盟を組織して活動の重点を移したことが二人

の仲が疎遠になつた最大の要因で、あつた。それに平盛もまた評議会の解散後、運動への意欲を失い、第一線から退いたのが皮肉なことに平盛が戦線から去つた後の岡山労働運動の中心的リーダーになつたのが中原であつた。

一九三七年七月に日中戦争が始まって以降、経済統制が強まる中で平盛が當んでいた町工場の經營も次第に困難になり最初に述べたように古い仲間の紹介で四〇年に京都へ来て立命館大学に勤めるようになつた。

激動の時代に弾圧に抗して岡山労働運動の發展に献身した平盛は運動の過程で知遇を得た何人かの忘れられない仲間の思い出も語つてくれた。評議会の大会で女性ながら堂々たる発言をして大会を鼓舞した小見山富恵が岡山労働運動の出身であることを知り親しみを感じた。中原と共に岡山労働運動の掉尾を担つた松崎久馬次の精悍さにも頼もしさを覚えだし、労働農民党の県連で最左翼だった麻田哲雄が戦後の第一回総選挙に共産党から立候補した時、京都から応援に駆けつけ小田町の麻田の住居を訪ねたら町の目抜き筋の豪邸だったことに驚き、更に呉服屋だった企業の全財産を運動に捧げ尽くしたことを探りあらためて畏敬の念を深くした。徳島から岡山医大へ入学し卒業後、東京・五反田の無産者診療所を皮切りに戦前の無産医療運動を双肩に担つた大栗清実が初めて平盛を訪ねて来た時の誠実な人柄も「何時までも忘れられない」と語つてゐる。

「これがマルクス万年筆ですよ」と、平盛は取材が終わつた後で実際に見せてくれた。「ああ、これですか」と手に取つて見つめる私に向かつて平盛は、「もうこれ一本しかありませんが、これを差し上げます、貴方が持つていて下さい」と、強く押付けた。私は強い感動と責任を見えてくれた。

（丁）

「君が世の安けりせばかねてく押付けた。私は強い感動と責任を覚えながら万年筆を懐に収めて平盛に別れを告げた。

（丁）

激動する時代の政治や社会へのアプローチの仕方において、ここには共通したある純粹なものを感じずにおれない。ある意味では「政治ぎらいの政治参加」ともいうべきものだ。そして僕は、眞の人間解放の政治とは、こういう姿勢の政治へのアプローチの中にこそあらうとひそかに思うのである。「政治ぎらいの政治」など左右をどうしても詩の筆を投げてて街頭へとび出さずにはおれないのだ」と歌つたのは平野国臣である。

高田君がいつも洩らしていたといふこの述懐は、高田君の全生涯の姿勢を象徴していくて美しい。

ひとすじの道 ——高田三良の生涯——

内海繁

1 生涯を象徴する言葉

た。

ところが、この回想録の中の一

篇に、高田君が常々次のように語つていたという紹介があるので読んで、僕は胸うたれたものである。

（丁）

私はおとなしく本でも読んでおればよい人間なのです。しかし今はそんなことは言つておられない時代です。だから私のような人間でも立ち上がりつて斗わねばならない」と。

（丁）

彼は一番健康だったし、自分を律することきびしく、暴飲暴食と

「まことに立派な人物だが、ただ一つ、いい年をしてまだ組合運動や文学運動に熱中しているのが、玉にキズだな」と、晩年の高田三良君を評した人がある。

（丁）

「それこそが玉の玉たるところじゃないか」と言つてみても通じるはずもない、これが現代の多数派の見解だろう。僕はニヤニヤ笑いながら聞くにとどめる他なかつ

（丁）

僕はハイネの次のような述懐を

思い出さずにおれなかつた。

（丁）

「自分は政治などに興味を持つ型の人間ではない。詩と絵と音楽と娘と小鳥と花の世界を好む型の

病気の祟みたいながらで酒をのみ煙草を吸い夜ふかしをしているものから見ると、彼の健康はまぶしいような気がして、いたもので、そんな彼が一番先に逝ってしまうなどとは考えられるわけがなかった。

そして人間の愚かさは、こんなことになるのだったら生前なぜもつと会い語り書き行動を共にしておかなかつたのかと、虚しい悔いをくり返す有様である。

戦後は彼と会うことも稀れだつた。しかしそれは僕らの場合「疎遠」というものではなかつた。二五年間にわざか二度か三度中中国山脈の北側と南側に住み、「私」のような人間でも立ち上がりて斗わなければならぬ時代に生き、それぞれが精一ぱい斗つてゐることの安心と信頼が、二五年の歳月を意識させなかつたのである。

3 「窓」から風の中へ

昭和三年、六高生だった僕らは同人詩歌誌「窓」を発刊した。

高田三良、吉塚勤治、芥唯雄、安本久米雄、伊東祐之助、内海繁他二、三名の十人ほどの同人だった。たしか六号まで出したように思つた。が正確ではない。傾向はまちま

ちだつたが、吉塚は当時朔太郎や犀星に傾倒していたし、芥や高田や僕はむしろ短歌の方に重心がかっていたが、全体としてあの頃の行き詰まつたやりきれぬムードの中でニヒリズムと懷疑とデカダンが主調をなしていたようと思う。朔太郎が吉塚に手紙をよこして、「窓」をほめてくれ、なお上京して一緒に雑誌をやらぬかと誘つてくれたことをおぼえている。

だが、翌年には、僕らは卒業して、高田、吉塚、安本、内海は京大へ、芥、伊東は東大へ移つた。

そして「窓」は自然廃刊になつた。僕ら京都組は、いよいよニヒリズムとデカダンに突入して、毎夜河原町通りや新京極をほつつき歩き酒をのんだ。巷には「君恋し」や「東京行進曲」や「浪花小唄」が流行していた。(短歌作品抄の「混沌の日々」参照)

しかしそういう生活は長くは続かなかつた。僕らはそういう中から急転回してマルクス主義に移行し、社会科学研究会に情熱して行つた。東京組も期せずして同じコースを辿りはじめていた。

「窓」時代に文学を通していかに生くべきかを探求してギリギリのところまで自らを追い詰めたのが、やつと活路を見出したとも言える

のだろう。そうして僕らにはそれがつづいた。

高田は台湾に住むようになり、から数年間、いわば疾風怒濤の月日が始まったのである。

僕らの生涯にとって最も決定的であり最も貴重であり、それが生涯の原点となり、僕らの友情が不動のものとなつたのはこの時期である。

したがつてこの時期の高田三良のあしあとをはじめ、僕らの文字どおり青春を賭けたあく

を描かなければ高田三良の回想の主柱が欠けるのであるが、残念ながら紙数がない。(いかが改めて書くことにする)

さて、当然のこととして僕らはそれぞれ実践運動にかかわつてゆき、非合法生活の中に別れて入つてゆき、やがて当然のこととしてそれぞれ弾圧の嵐の中で検挙され、傷つき監禁される。そんな中で日本はいよいよ満州侵略を開始し、軍国主義とファシズムが國をおおい、僕らは次第に手も足も出ない息詰まるような状況におしこめられ、いわゆる「暗い谷間」の時代を過ごさねばならなくなつた。

4 暗い谷間と戦線の高田君

そんなわけで昭和八年頃から、僕らはファシズムと戦争の嵐に吹き散らされた格好で四散し、いわば大雷雨の中で昆虫が草の葉裏に息をひそめて時を待つようなあけ

くれがつづいた。

高田は台湾に住むようになり、芥は東京、安本は大阪、吉塚は岡山というふうにはなればなれになつた。

しかしその内で、せめてはもう一度「窓」を開いてわれわれの間三年頃だつたろう。もとよりこんどは印刷して公刊することなど到底不可能な季節だから、全部生原稿のまま当番の編集者が表紙をつけて綴り込み、それを回覧するといふ形だつた。

僕らはそれによってお互いの生活状態や精神生活を知り合い、もつて支えとすることができたのだが、それもいつまで続いたのかよくわからない。戦争はいよいよ奇烈となり、国民生活はいよいよ迫り、いつめられ、自由はいよいよ禁圧され、いわゆる「第二次「窓」もまた自然廃刊を余儀なくされた。一九年、二〇年頃は、全国各都市が空襲され焼きはらわれるようにも不明の状態になつていつたのである。

それにしても、この「窓」が残つていたら当時の僕らの生活があ

る程度わかるのだが、残念なことにそれがただ一冊しか残つていなければ。ついでに記せば、第一次「窓」に至つては一冊もない。同人の誰一人も持つていらない。そしてどこをたずねても存在しないのである。いわば「幻の雑誌」となつてしまつているのである。原因は明白である。各自がそれぞれ検挙されたとき、全部押収されてしまつたのだ。当時の特高警察は絶対権力をふるい、何の関係もない古典や辞書までも「証拠品」として押収したもので、「窓」のようなデカダンが主調の同人誌であろうと、彼らの目にうさん臭いとうつれば一冊も残さなかつたのである。

高田は、昭和八年末に現役兵として入営し、翌年除隊、再び一二九年九月召集されて中部戦線にやられ、一〇月一二日に江蘇省羅店鎮付近で戦傷をうけて入院、翌一三年三月除隊。ところが昭和一八年二月またも召集され、敗戦まで帰れなかつた。

負傷したのは、日中戦争がはじつまり昭和八年から二〇年までの間に、三回戦場にかり出され負傷しているのである。

負傷したのは、日中戦争がはじつまり昭和八年から二〇年までの間に、三回戦場にかり出され負傷しているのである。

には九月二九日の日付があるから、彼の負傷はそれからわずか一三日後である。

僕が新聞の戦死傷者の名簿で知つたのはいつだつたかさだかでないが、当時の「短歌評論」に次のような作品をのせている。

裏山に今宵もぼうぼうと泉は
啼き 吾が友はすでに上海に傷つき

大陸の秋風に傷がうずくと書いてきた 友よただ空を仰いで
甲斐ない俺だ

僕らはもはやなすすべもなく、
またその怒りと哀しみをまともに
歌いあげる自由もなく、こういう表現で盟友の生死をおもう他なかつたのである。

5 戰後再び嵐の中へ

永い戦争が終わつた。満州事変からかぞえると一五年になる。

僕らはやつと、暗い谷間から解放されて街頭へとび出した。

僕らは青春の大半を、むなしく暗い谷間の一五年間に失つたが、それでもかかわらず一五年前の情熱が湧きたち、胸をふくらませて駆け出した。それは僕らにとって二度目の疾風怒濤時代の幕開きだつた。

そうしてまた、僕らはラ・マルセイエーズの歌声を聞き、詩の筆

を投げて街頭へとび出すことにもなつたのである。高田君も吉塚、安本、僕らも、みな詩や文学を棚上げし、あるいは休業して、ひたすら社会運動に没入したおもむきがある。

僕らが多少とも自分自身の席に戻り、もう一度文学をとりあげようという姿勢にかえつたのは、「安保」以後といつてよからう。

それは、本質的には必ずしも幸いとはいぬ状況の産物である。いわゆる日本の経済の高度成長の中で、支配体制が「安定」し、いわゆる「昭和元禄」時代が到来し、もはやロマンチックにまで性急な運動から沈潜して、持続的で多面的な、そして地味な歩みが必要となってきたことにかかわりがある。一部では、そのためにかえつて一層性急なアーチークな狂乱の動きが始まるのだが、永い運動の歴史を経験してきた僕らには、そういう児戯にひとしい暴走コースは無縁である。

とはいっても、僕らは自分自身の椅子に戻るのが遅きに失したきらいがある。だけなく、なおたえず片足も街頭へとび出すことを余儀なくされている。

高田君は、豊岡高校教師としておそらく「好ましからざる教師」おそらく「背中」と僕らが仇名している。

役員として、黙々と非人間的な教育の危機と斗いつづけねばならなかつたし、晩年には、その居住地浜坂に火力発電所が建設されるといふので、住民が反対斗争に立ち上ると、その組織の議長を引受けた。吉塚君にしても、選挙にかつぎ出されて落選した上失業し、上京して転々としながら、やがてまた岡山に帰り、自転車に茶の葉をつんで行商するような時期を持ったものだ。

したがつて、戦後はかえつて僕らは会う機会はもとより、文通もまたな状態の中で、二五年間が矢のように流れ去つたのである。

高田君が六〇年代になつて、但馬地方の民主的な文学運動の中心となり、やがて「日本民主主義文學同盟但馬支部」の責任者となり、活動していたことも僕らにはあまりわかつていなかつた。

「但馬新文芸」を出すなどして、馬鹿の広い頑健な彼のことだから

ら、大したことはないだろうと安心していた。それにしても、年齢からしてもこの際、もう文学一本にしばる転機にせよとすすめ、彼もそうすると返事をよこしていたところが、秋に入つてまた入院したと知らされたが、それでもまだ深くは心配しなかつた。

そのうち偶然、妹の弘子さんに会い、「じつは、兄の病気は、本人には知らないけどガンなんです」ときかされて、僕ははじめで事態の重大さを知つた有様である。

それから彼の死がやつてるのは速かつた。僕が京都の病院を見舞つたときは、もうひどく衰弱していて話もありできなかつた。しかし彼の持前の忍耐づよさと物静かさが、絶望的な印象を与えなかつた。だが死はもはや時間の問題だつた。

そして、僕はそのとき、奇妙な苦痛と自己嫌厭と、言語というものに対する不信ともどかしさを、したたかに味わつたものだ。「何か言い残したいことはないか。君はもう死ぬのだから、今のうちに言つておいてくれ」という意味のことを言つたがつたし、それをきいておくことは必要でもあるにもかかわらず、到底それは不可能で、結局僕は心にもなく「元氣を出し

ら、大したことはないだろうと安心していた。それにしても、年齢からしてもこの際、もう文学一本にしほる転機にせよとすめ、彼もそうすると返事をよこして、いたところが、秋に入つてまた入院したと知らされたが、それでもまだ深くは心配しなかつた。

そのうち偶然、妹の弘子さんに会い、「じつは、兄の病気は、本には知らないけどガンなんです」ときかされて、僕ははじめで事態の重大さを知つた有様であ

て、早くよくなれよ。そして大いに作品を書いてくれ、またくるからな」と愚劣なウソをしゃべる他なかつた。

それから何日もたつていなかつた。「もういよいよダメです。昨夜ウワゴトの中に、吉塚や内海やその他二、三名が、かすかにきま

とれましたので、死ぬ前にもう一度会つてやつて下さい」という連

絡をうけて、僕は吉塚と共にかけつけ、衰えきつた彼と瞳を合わせたのが最後だった。

一月八日 徒は遊んでしまつた。
そして一月八日、浜坂の自家で葬式。

それから彼の死がやつてるのは速かつた。僕が京都の病院を見舞ったときは、もうひどく衰弱していて話もあまりできなかつた。しかし彼の持前の忍耐づよさと物静かさが、絶望的な印象を与えたかった。だが死はもはや時間の問題

だった。
そして、僕はそのとき、奇妙な
苦痛と自己嫌厭と、言語というも
のに対する不信ともどかしさを、

表紙画作者・執筆者紹介

水野秋
みずのあき
東京在住。
労働ジャーナリスト。

大南正瑛
おおなみ まさてる
高槻市在住。
機械工学者。
元立命館総長。

編集後記

の立命館教職員組合副委員長であり、私大教連でも活躍された。高田三良さんは岡山の第六高等学校をへて京大文学部学生時代に治安維持法による弾圧を受け、戦後には兵庫県立の高校教員をされた。妹にあたる故福田弘子さんの受難についても本誌一九号に掲載されている。

僕は「窓」の同人たちを代表して浜坂へ行き、弔辞を読んだ。式は、キリスト教によつて行われたが、牧師が、「無神論者であつた貴方が、多くのキリスト者よりも、キリストの教えをよく実践されました」というふうに弔辞の中でのべられたのが印象的だった。僕は暗い播但線の夜汽車の中で、高田三良をおもい、僕らの四〇年

ツ軍が英本土上陸に成功することをあてにして、対米英蘭宣戦にふみこんだために、大きな災厄におち入った経験がある。安倍首相の祖父岸信介が国務大臣だった東条失敗も歴史的教訓として学んでほしいものだ。（下・I）

会員をひろく募っています。
年六回(隔月)発行で、会費
は三、〇〇〇円です。表紙に
ある振替口座にお申し込み下
さい。

〔事務局〕

京都市左京区高野東開町
一一三 第三住宅

にわたる友情を回想して、二〇首ばかりの短歌を作ることによって悲愁にたえた。